

CHILDREN'S VOICES

ICAN NEWSLETTER



2020年前期を 振り返って

皆さま、いつもアイキャンを応援して下さい、ありがとうございます。今年3月より事務局長代理を勤めております鈴木真帆です。2005年にアイキャン・マニラ事務所でボランティアを始め、2007年から理事としてアイキャンの運営に携わってきました。こうして再びアイキャンでお仕事ができ嬉しい反面、今年は新型コロナウイルスの影響により、例外的な対応を迫られる場面が多々あり、アイキャンという国際NGOの運営を担う重責を改めて感じています。

皆さまもコロナ禍において、今までとは異なる環境に身を置かれ、戸惑われる事も多かったのではないのでしょうか。アイキャン事業地の人びとにとってこの感染症拡大は、たちまち生命危機に直結しました。感染拡大防止のため首都圏封鎖が行われたフィリピンやジブチでは、脆弱な社会構造の中で食糧や現金収入の確保が困難になり、飢えに苦しんでいます。そのような状況を受け、アイキャンではこうした人たちの命を繋ぐために緊急物資配布を行ないました。

世界には、私たちの日常からは思いもつかないような困難に遭う人びとが沢山います。そして、その人たちに思いを向けて下さる日本の方々もいらっしゃいます。アイキャンはそうしたみなさまの思いを形にし、行動できる団体であり続けたいと思います。アイキャンを応援して下さいの方々に改めて感謝いたします。



アイキャン事務局長代理
鈴木 真帆

活動ダイジェスト |

2020年5月～10月のアイキャンの活動

1. フィリピン共和国

<首都マニラ近郊>

- マニラ首都圏・トンド地区において、給食提供を週5回実施し、3～5歳の子どもたち延べ1,380名に対して、栄養価の高い食事を提供しました。また、同地域の母親73名に対し栄養研修を、134名に対して感染症予防を含む保健研修を実施しました。
- フェアトレード生産団体に対して、需要の高まりのある布マスクの製作アドバイスと、財務管理研修を実施しました。
- 児童養護施設「子どもの家」に、新たに2名の子どもが入所し、計6名の子どもたちが、衣食住が保障された安全な環境で生活し、学校に通うことができました。新型コロナウイルスの影響でリモート授業となったため、対応できる学習環境を整えました。



<タール火山噴火災害>

- タール火山噴火災害の影響で損壊した、被災地の校舎計7校(18教室)の修復作業が完了し、3,411名の子どもたちの教育環境を改善させました。
- 被災地の住民に、建設活動に従事して賃金を得る機会を提供しました。



<COVID-19緊急救援>

- 新型コロナウイルスの影響で収入を失った、路上の子どもやゴミ処分場地域に住む計426世帯に対して、食糧や衛生用品などを配布しました。
- パヤタス住民組織と協働で、路上の子どもや住民たち延べ515名を対象に、感染症予防のための啓発活動を7回実施しました。

2. ジブチ共和国

<ジブチ国内3つの難民キャンプ全てでの活動>

- 子どもたちの状況を把握し適切な対応をするため、家庭訪問842件と、子どもや保護者26名に対してカウンセリングを行いました。
- 難民キャンプ内の青少年によって運営される「子どもの広場」は、人数制限を設ける等の新型コロナウイルス感染対策を講じた上で、計84回開催し、延べ1,778名の子どもが参加しました。
- 「子どもの広場」の活動を担う難民ボランティアに対するアニメーター研修を実施し、15名が参加しました。
- 自己表現や他者を尊重することを学ぶ機会を与える「子ども議会」を実施し、19名が参加しました。
- 新型コロナウイルス感染症予防や、子どもの保護などがテーマの啓発活動は、密集を避けるため各集会場への訪問式で行われ、延べ1,293名が参加しました。



<一部の難民キャンプでの活動>

- 新型コロナウイルスの影響により、食糧入手が困難な子どもを対象とした食糧提供を延べ137名に、ミルクの提供を幼児116名に実施しました。



3. イエメン共和国

- 首都サナア市で暮らす子どもたち100名に対し、計3回栄養改善のための粉ミルクを提供しました。
- 新型コロナウイルス感染予防対策の啓発リーフレットを配布しました。
- 2020年12月に予定する大規模の食糧提供に向けて、イエメン現地職員4名と提携団体職員3名とオンラインで調整会議を実施しました。

4. ソマリランド共和国

- ソマリランド中部において、新たな貯水池建設のための準備や調整を行ないました。

4. 能力強化事業（日本）

- 教育機関や、他団体主催のセミナーやイベントなどで、オンライン・対面を含む講演を計6回、178名に対し行ない、フィリピンの路上の子どもたち、およびイエメンやジブチの難民についてや、フェアトレードについて話しました。
- NGO相談員として、2つの教育機関で計220名に対し、オンライン講演を実施しました。また、NGOの活動やボランティアなどに関する相談を、計391件受け付けました。
- 日本事務局で2名のインターンを受け入れ、クラウドファンディングの立ち上げや、フェアトレード事業補佐、講演・交流会、街頭募金活動の実施補佐として活動しました。



- フィリピンの事業地を訪問するスタディーツアー遂行における、リスク管理に関するセミナー受講や、オンラインスタディーツアー企画に関する準備を行ないました。

5. ボランティア・寄付活動推進事業（日本）

- 「フィリピン路上の子どもたちを応援する街頭募金活動」を2回、「新型コロナウイルスの影響を受けた人びとへの緊急物資配布への街頭募金」を1回実施し、延べ45名のボランティアに参加頂き、計350名の方々が募金してくださいました。※新型コロナウイルスの影響で長らく街頭募金活動を自粛していましたが、10月に再開しました。
- 書き損じハガキ(計12,584枚)や、古本や不要品(寄付件数47件)の収集活動を行いました。
- 延べ62名が事務局ボランティアを行ってくださいました。
- 今期、マンスリーパートナーに新規でお申し込みいただいた方は18名でした。
- 最新の活動情報を広く発信するため、ホームページの改装、InstagramやLINEなどSNSアカウントの新設を行ないました。また、刊行物のデザインを改定をしました。
- フィリピンのフェアトレード生産団体へ発注した布マスクが、10月上旬に日本へ入荷され、計173枚を販売しました。
- フェアトレードの啓発と、資金調達を目的としたクラウドファンディングでは、計56名の方々より応援の資金をいただきました。



6. 国内自然災害（長野）

- 令和元年台風19号の被災地域の長野市内において、家屋修繕活動を行ない、修繕された一部の被災家屋は、地域住民の集会場として生まれ変わりました。
- 被災写真の汚れを取り持ち主の元へ返却する、写真洗浄事業を実施しました。

アイキャン職員紹介 |



アイキャン日本事務局 雨宮身佳

2020年8月にアイキャンへ入職し、ジブチ事業を担当しています。大学院の研究で、アフリカのナミビアへ留学したことがきっかけで、開発途上国に直接関わる仕事がしたいと思うようになり、これまで開発コンサルタント企業や青年海外協力隊などで主に教育分野のお仕事を担当してきました。

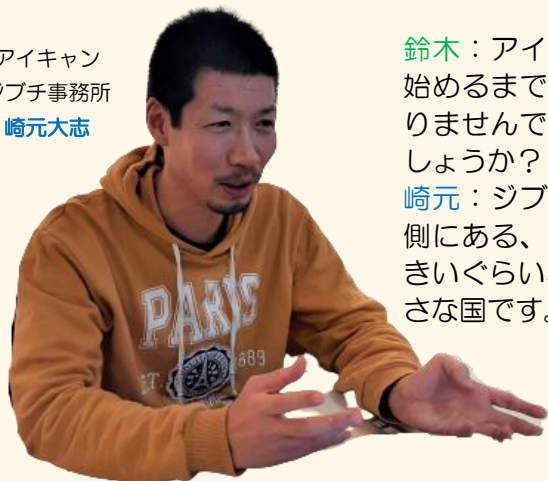
難民キャンプにいる同僚スタッフからの報告を聞き、現地の子どもたちが置かれている状況を知り苦しく感じることもあります。今自分に「できること」は何かを問いかけ、現地の人びとを思いながら仕事をする事は、私にとってアイキャンの仕事のやりがいになっています。

対談インタビュー

特集 | 新型コロナウイルス影響下の ジブチ難民キャンプの生活に迫る

ジブチ駐在員の崎元大志へ、事務局インターンの
鈴木清香がオンラインでインタビューを実施しました。

アイキャン
ジブチ事務所
崎元大志



鈴木：アイキャンでインターンをするまで、ジブチという国を知りませんでした。どんな国なのでしょう？

崎元：ジブチはアフリカ大陸の東側にある、面積は四国より少し大きいぐらい、人口は95万人程の小さな国です。比較的情勢が安定しているため、近隣から約3万人もの難民が避難しています。

鈴木：アフリカのジブチでも、新型コロナウイルスは流行しているのでしょうか？

崎元：人口95万人に対して、11月初旬時点で約5,500名の累計感染者数なので、割合としては日本よりもかなり高いですね。死者は累計61名と聞いています。

鈴木：日本ではクラスターなどが発生していますが、ジブチではどのような感染経路なのでしょう？

崎元：特徴的なのは、イスラム教の礼拝堂のモスクに人が密集して感染源となり得ることや、慣習として対面で近い距離で喋ることが多く、飛沫感染のリスクが高いことです。また、ジブチは「世界一暑い国」と言われるほど気温が高く、ジブチの人たちは暑さでウイルスが蔓延しづらいと考えているところもあり、マスクや手の消毒をするという感染予防意識の低さが見受けられます。

鈴木：難民の方への影響はどうでしょうか？

崎元：主に3つの影響を感じています。①仕事を失う人びとがいること。②ロックダウンの影響で難民キャンプに取り残された子どもがいること。③精神的ストレスの問題です。特に②と③の問題は、被害の統計上には表れない、現場で活動していたからこそ分かった問題でした。

鈴木：②のキャンプに取り残された子どもがいるというのは、どういうことでしょうか？

崎元：難民キャンプ内では仕事はほとんどないので、難民の人びとは首都へ出稼ぎに行き、月に1回程度だけ、子どもの待つ家族のもとに帰るという生活をしている大人が多いです。父や母や出稼ぎに行き、ロックダウンが始まってしまうと身動きが取れなくなり、子どもたちだけキャンプに取り残されてしまった例がいくつもありました。

通常、難民キャンプでは定期的に食糧が配給されるのですが、子どもだけでは手続き上、食糧を受け取ることができないため、ご飯が食べられず危機的な状況に陥った子どもたちがいました。

鈴木：それは大変ですね。子どもたちはどうなってしまったのでしょうか？

崎元：そのような状況を想定し、アイキャンはキャンプで食糧を受け取れていない世帯へ食糧提供を行ないました。実際キャンプで状況調査をしてみると、想定よりも多くの世帯で子どもが取り残されており、事態の深刻さに気づくことができました。

鈴木：③精神的ストレスを抱えた、というのは日本とも似ている部分ですね。

崎元：そうですね。難民キャンプでは、ストレスが暴力に繋がってしまうことがあります。性的暴力を受け、10代前半の女の子が妊娠してしまうような事件があったことも聞いていて、思いもよらぬところで影響が出ているように感じます。

鈴木：まさに二次災害ですね…。アイキャンとしては、それらの問題にどう対処していくのでしょうか？

崎元：ジブチ事務所にいるスタッフの中には、カウンセラーの資格を持つ者もいるので、ストレスや暴力を受けた子どもに対してはケアを行なっていきます。また、そのような暴力を受けないようにする「予防」にも力を入れていきます。

鈴木：なるほど。ジブチや難民キャンプについて、少しでもイメージが持てたような気がします。最後に、今後の活動への意気込みを教えてください。

日本事務局
インターン
鈴木清香



崎元：私も、現地スタッフも、現場での課題を目の前にして、自分にできることを積み重ねて活動しています。難民になったことに関して、子どもたちには何の責任もないですからね。子どもたちが少しでもいい子ども時代を送れるよう、活動を続けていきたいと思っています。



事業地の声

フィリピン・トンド地区の 給食プロジェクト参加者の声

マニラで最も貧しいと言われるトンド地区では、廃品回収をして換金することで生計を立てる人びとや、ごみとして捨てられていた残飯を洗い、再加熱し、食べて生きている子どもたちがいます。アイキャンでは今年2月より、トンド地区に住む子どもたちの栄養状態を改善するため、住民とともに、3～5歳の子どもたちを対象にした給食提供と、地域の保護者への調理・栄養改善・保健研修を実施しています。



フィリピン・トンド地区 ゲレーロさん親子

- ・ マージェリー(母)28歳、レイチェル(娘)5歳
- ・ 父、母、3人の子どもの5人家族
- ・ 父がスカベンジャー(リサイクルできるゴミを収集し換金する)として生計を立てている

マージェリーさん：娘と一緒に、週5回給食プロジェクトに参加しています。私自身は、ボランティアのとして皿洗いなどの作業を手伝いながら、調理研修に参加しています。少額の予算でも栄養価の高い食事の作り方を学ぶことができるので、調理研修に参加できることは私たちの家計の大きな助けになっています。

レイチェルちゃん：給食プロジェクトに参加するのがとても楽しいです！一番楽しかったのは、手の洗い方を教えてもらい、みんなで実践したことです。ご飯を食べる前と、みんなとお絵かきなどの遊びをする前には、石鹸を使って手を洗うことを学びました。



アイキャン・マニラ事務所 エドガーさん

- ・ 2016年9月にアイキャンマニラ事務所へ入職
- ・ トンド地区の給食事業において、子どもたちとの活動のコーディネートや、行政・自治体との調整などを担当する

エドガー：この地域の多くの子どもたちは、それぞれの年齢に対する平均体重・身長を下回っていましたが、給食プロジェクトを開始し身体測定を定期的に行なった結果、これまで参加した子どもの約40%の測定結果が改善されました。参加している約60名の子どもたちの給食を作るためには、マンパワーが非常に重要ですが、今ではこのプロジェクトの重要性を理解した、地域の人びと12名がボランティアとしてプロジェクト運営に関わってくれています。小さな子どもたちの体重が順調に増え、子どもたちも嬉しそうな顔をしているのを見るときが、私にとって一番幸せに感じる瞬間です。

パートナーの声 | マンスリーパートナー様より



金森 雄高 様

アイキャンに直接関わる様になって5年目です。元々の職業柄、紛争や災害に見舞われる人びとも出会う様にもなり、アジアでまだ紛争の渦中であるミンダナオで活動するアイキャン知りました。年に数回の募金などをした際には、手書きでアイキャンから感謝の文面が送られて来るなど、どのNGOよりハートフルなものを感じ、「アイキャンの近くに住もう」と名古屋市に越して来ました。初めて実際に職員の方々にもお会いし、マンスリーパートナーにもなり、時々事務所で直接手伝う私になりました。今は帰国報告会の大ファンです。



COVID-19救援活動資金のご寄付のお願い

アイキャンでは、4月よりフィリピンでの新型コロナウイルス拡大に伴うマニラ首都圏封鎖によって、収入を失い空腹に苦しむ路上の子どもやその家族、ゴミ処分場地域で暮らす人びとの命を繋ぐために、食糧や衛生用品などの緊急物資配布を実施しています。命が危険な状況に置かれたフィリピンの人びとの命を守るために、皆さまのお力添えをどうかよろしくお願い致します。

■ご寄付の方法■

- ・クレジットカード：CANPAN(日本財団)の決済サイトより、今すぐにお手続きができます。
- ・口座引き落とし：会報同封の振込用紙からお申込みいただくか、事務局へお問い合わせください。詳しくは、アイキャンHPからもご確認いただけます。（最下部のQRコードを読み取りください。）

■ご寄付の種類■

- ・通常のご寄付：好きな金額をクレジットカードまたは、銀行振込にてご寄付いただけます。
- ・マンスリーパートナーになる：毎月1,000円（1日33円）から、定額のご寄付を自動引き落としによってご寄付いただき、アイキャン事業地の子どもたちの活動および運営に活用する制度です。

事務局からお知らせ

「不要品」を寄付できます！

ブックオフコーポレーションとの提携サービス「キモチと。」のWebサイトがリニューアルし、古本・CD・DVDだけでなく、おもちゃ・ブランド品・宝飾品・小型家電などもご寄付の対象となりました。詳細はホームページ、または同封のチラシをご覧ください。

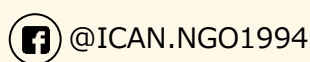
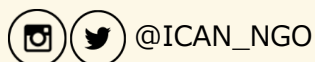
定期発行物の閲覧方法について

本紙「会報72号」のデザインを改定しました。事業地の活動の様子を、分かりやすくお伝えできるよう努めて参りますので、引き続きご愛読の程よろしくお願い致します。また、マンスリーレポートも継続して発行しています。アイキャンHPの「定期発行物」よりご覧いただけます。

特定非営利活動法人アイキャン（ICAN）

アイキャンは1994年より、貧困削減や紛争解決などに取り組む国際NGOです。

住所：〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須3丁目5-4 矢場町パークビル9階
TEL/FAX: 052-253-7299（火～土 12:00～19:00）
MAIL: info@ican.or.jp WEB: <https://ican.or.jp/>



WEB QR

